

明治後期における南画再評価について

東京国立博物館 植田 彩芳子

本発表は、明治後期における南画再評価の具体的な様相について、特に明治30年代を中心に考察することで、新知見を提示するものである。

幕末明治に活況を呈した南画は、明治15年にフェノロサの龍池会講演(『美術真説』)によって南画が否定されて以後、特に関東で退潮を見せたことは既に知られている。明治22年に開校した東京美術学校では、南画はカリキュラムから外された。ところが、明治43年以降に後期印象派が受容されると、その主観主義的傾向と南画の人格主義や表現が似ているとして再評価され、その後の大正期の新南画ブームへとつながっていく。南画再評価については以上のような流れが、先学の研究によって明らかにされている。

しかし、発表者の調査によると、南画の再評価は明治43年以前から始まっていたことが判明した。そこで、この研究発表では、明治中期から後期における南画評価の変遷を同時代の文献資料をもとに考察し、

(一)南画の再評価は明治30年代後半から盛んになったこと、(二)再評価にあたっては、南画の様式ではなく、「文人画家」という絵画理念が西洋の芸術家像と重ね合わされて評価されたこと、この2点を中心に明らかにする。この問題の解明は、明治後期における絵画観の変容を示す点でも重要な意義を持つだろう。

第一に、同時代の文献資料をもとに、明治35年頃から、南画の再評価が始まったことを指摘する。フェノロサの南画否定以後、退潮を見せた南画だが、明治30年代半ばから、南画の再人気を伝える記事が目立つようになる。早く明治35年8月の『日本美術』には「南画復興の気運」と題する記事が掲載され、頼山陽・貫名海屋・田能村竹田などの人気の上昇を伝える。翌明治36年1月の『日本美術』にも「所謂南画復興の気運」と題する記事が掲載される。明治41年5月の『国華』に発表された瀧精一の「文人画説」には、「一時廃れたりし文人画の近頃に至りて再び世人の歓迎を博せんとするの傾向あるは何ぞや」とあり、翌明治42年から43年にかけて『国華』に長文の「蕪村論」を掲載した澤村専太郎も「近時、世の好尚は漸く忘れられむとする文人画の上に向ひ来り」という。このように、後期印象派が紹介される明治43年以前から南画の再評価は始まっていたのである。

第二に、その再評価の具体的な様相を、文献をもとに考察する。明治41年の瀧精一「文人画論」(『国華』)などに注目すると、当時、南画の様式ではなく、「文人画家」という画家のあり方・絵画理念が西洋の純正美術(Fine Art)の芸術家像と重ねられ、評価されていた様子がうかがわれる。そのため、いわゆる南画家だけでなく、牧谿、玉澗、相阿弥、雪舟、光悦なども文人画家に含められた。

以上の考察は先行研究では指摘されておらず、日本近代絵画史における南画をめぐる問題に新たな局面を示すものと思われる。